

われらソ連に生きて

ソ連帰還者生活
擁護同盟文化部

われら
ソ連に生きる

八月書房

ソ連歸還者生活擁護同盟文化部編集



一九四五年 八月十五日

おれたちの知らぬまに戦争は終つていた。

おれたちの目撃したものは何であつたか！

着のみ着のまま驛に殺到した住民たちは

どつたかえした荷物の中に置き去られ、

赤ん坊をだきしめる若い主婦

母をもとめて泣きさけぶ子どもたち

ボウゼンとたたずむ老婆の顔には

戦争にたいする無言の呪咀がただよつていた。

そして、いつ乗れるかわからない汽車を待った。

その中を將校とその家族

そしてその荷物を満載した

避難列車はひきもきらず南下する。

不安と 怨嗟と 地獄のような呪咀の

うずまきのなかに

北満の夜はふけていつた。

あれはてた曠野の天は

炎々として燃えつづける。

無敵と呼ばれた「皇軍」はやぶれ、

高級將校は指示もあたえず

飛行機を驅つて いち早く飛び去つた！

死ねばよいのか！

生きよというのか！

神の子だつたはずの兵隊は

ボロ衣を着て あてどなくさまよう、

ああ……

おれたちに死ぬことを教えた將校は

腹も切らずにいつたいどこへいつたのだッ！！

目次

序	二
詩	二

I・入ソから歸國まで	九
------------	---

あたらしい體驗	一〇
---------	----

俘虜生活第一歩……收容所の生活……苦しかつたコルホーズの思い出
……あこがれのタンボフ……たくましい労働者の社會……ソ軍歸還兵
と語る……「ママシ」退治……捕虜のストライキ……職場闘争

なぞの國の人々	四〇
---------	----

はじめて見たソ連軍……赤ん坊と若い主婦……捕虜歓迎……軍人と市
民……捕虜も國際人……歸國して

虚無から立ちあがる	五三
-----------	----

矢野健兒

中央アジア、バルハシというところ……江川三郎と「にんじん」……

オー・カー（病弱者部隊）……ラストボール

當番兵の手帳から……………田鎖源一 六九

北歐の俘虜收容所……めし分配……階級……民主運動の芽ばえ……

解放された當番兵……反動將校をさばく

シベリア鐵道一萬キロ歸還の旅……………堂前英一 八一

歸國準備の收容所の中……わかれ……汽車の旅……車窓に見たもの

乗船地ナホトカの思い出……………栗原康譽 九八

殘留志願……血の出るような建設……兵士大會……ナホトカの子供たち

ち……感激の復員式

II・民主化闘争記……………三二

收容所での民主化運動……………田邊稔 三三

反軍闘争がおきるまで……壁新聞「我等の聲」……代表委員會と友の

會支部……民主運動とソ連當局……代表委員會の解散とその後

文化活動家の手記……………高柳博也 一三

反動劇團「蛙座」の解散まで……………新劇團の編成とプレイヤーの苦心……

…脚本つくり……………舞臺うらの苦勞さまざま……………美術班の活動……………新文

化部での美術活動……………音楽家たちの活躍……………移動演劇……………文化サーク

ルの發生……………民主列車、東へ歸る

ほめられた脱走兵……………高柳博也 一七

III・ソ連みやげ（作品集）……………一六三

こんなこともありました（ルボルタージュ）……………栗原康譽 一六四

キノコ・タケノコ氏の話……………おふくろ……………異國の戀……………ぼくがパリシ

ョーイ・アルチスト（大藝術家）になつた話……………「失戀」と托兒所

寒風陣（句集）……………清水威至 一七九

新生の歌（行進曲）……………清水健作詩 一八〇

エリーナへの告白……………栗原康譽 一八六

スケッチ帳から

さまよう軍隊（繪）	高柳博也	一
子供たちのマスコット（繪と文）	高柳博也	三
カザンの病院生活（繪と文）	加賀邦	六七
汽車の家（繪）	伊藤文男	九六
收容所のバラックの中（繪と文）	伊藤文男	一三〇
移動演劇（繪）	高柳博也	一五二
ボルガとたたかう（繪と文）	加賀邦	一七六
森林伐採隊（繪と文）	高柳博也	二一七
いこいの家（繪と文）	高柳博也	二四八

III・ソ連邦とところどころ

女性の目にうつつたソ連（シベリア）	須藤敬子	二六
-------------------	------	----

松花江をくだりて……アムールのほとり……吹雪の中の薪取り……

慈父のように……炊事當番……ロマンス……病氣になつて

蒙古人民共和國記（外蒙）

清水久 三八

盲従者の罪……蒙古の生態……工場風景……ウラン・バートルの四季

……昂まる人民の文化

カスピ海のほとりにて（中央アジア）

有井四郎 三二

カスピの石……クラスノボドスクの日記……悲しき思い出

ソヴェトのスケッチ（歐録）

小泉健二 二五〇

山の一日……政治部員の指導ぶり……ソヴェト人の氣質……あたらし

い人々の生活

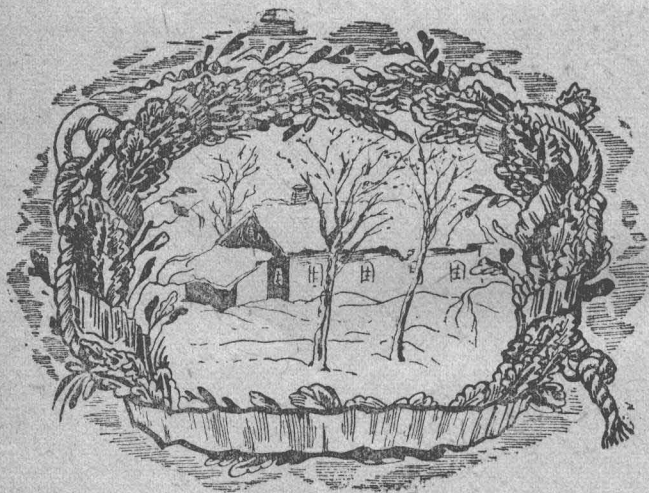
あとがき

二六七

表紙・トピラ・地圖……高柳博也

・ I ・

入ソから歸國まで



あたらしい體驗

山内雄二

1・俘虜生活第一步

一九四五年八月、敗戦だ、そして武裝解除。

武裝をとかれた軍隊、軍人。——これほどいくじのないものはない。これまですべてが武裝で維持されていた體面であるからだ。人間としての權威などは一つとしてあり得ない、見榮も外聞もあつたものではない。軍人の魂といわれた軍刀は完全に杖となつている。それくらいならまだしも、薪きわりとなつてゐるしまつだ。人間の生地なまというものはそんなものかどうかはしらないが、しかし、國寶といわれた關東軍ではそうだつたのである。

長い捕虜の行軍がつづいた。

ついたところは牡丹江の舊電信六連隊兵舎だつた。ここで作業隊が編成され、「歸還」という名目で出發することになつた。

宜第一三〇大隊に配屬されていた私は、將校のはしくれたつた關係上、ふたたび元の部隊に復歸して、將校大隊とともに行動することになった。

一九四五年十一月二日出發との待機命令が來た。夜中兵舎前にかがり火をたいて準備をいそいだ。ウラヂオを経由して歸るということだ。それにしてもサービスがよすぎる。身動きもならぬほど、氣前よく下給品がある。中にも眞新しい防寒被服など一装のものだ。おかしいぞ、ヘタをすれば歸國どころじゃないかもしれない、こういう危惧の念をいだきながらも列車に乗りこんだ。

案のじよう列車はシベリアを西へ西へとぐんぐん進んでゆく。私はもうどうでもなるがよいという、あきらめに似た氣持であつた。

ハバロフスクあたりを通るころは、まだまだ樂觀的で、沿海州から北海道の方に渡るかも知れないなどと語りあつたものだつたが、バイカル湖を通過するときなどはみんなヒッソリとして、一觸即發で泣きだしたいような沈黙がつづく。

ただ毎日、列車の驀進する音のみであつた。

ウラルに近ずいてからはみんなも私のようにあきらめたらしい。身のまわりのものを整頓したり、前途のまつくらな俘虜生活への心がまえをたてたりしはじめた。

一カ月の列車生活のうち、十二月一日にモスコウ東南方四〇〇キロのラーダという小驛に到着した。

ラーダの周圍はいちめんの松林である。その上まつ白な雪におおわれている。驛に近く木造の家屋が點在している。ふるさとの冬に無理をしても結びつけたくなる。ああ、ふるさとの冬よ！どこかその邊から「雄二ッ」と呼ばれそうだ。「あなた」と、妻が聲をかけて來そうである。しかし、現實に遠い異境であるということが意識にのぼると、わびしさがまたひとしおこみあげて來た。

日ごろ「斷乎として」とか「死をトして」とか、さまざまにえらそうな形容詞をふりまわしてはいりちらしていた高級將校どもは、この旅行中に、からイクジのない正體をバクロしてしまつた。そのダラシなさは實にひどく、淺ましいの一語につきた。一きれのパンにいがみ合つたり、くたくたに疲れていながら慾張つてたくさんの品物を持ちあるいたり、それだけならまだしも、生命の源泉たる食料と自分の財産とをまもるためには、どんな非人間的な行爲をも何ら耻としないや、からが多かつた。

下車して車輛の清掃も終つた。晝食をおえてからいよいよ收容所に向けて行進である。コンボーイ（歩哨）の話によると三キロとのことだつたが、「チェッ、これが三キロだつて。十キロ以上もあるではないか」という兵隊もいた。

重い足どりだ。シベリア流刑になる囚人のあゆみとちつとも違わなかつたらう。

收容所に到着した。

六、七尺もある鐵條網が數列、網の目のようにはりめぐらされている。そして各四すみには高い見

張り臺が嚴として建つてゐるのだ。自動小銃を小わきにしたコンボーイの姿は恐怖の對象になる。夜がきた。

餓えと寒さのため身動きするのもイヤだが、中には枯れ枝をあつめて飯をたきだしたのもいる。私も二、三人と組んで飯をたきだした。――そのたき火をみつめながら、これからさきのことを考えるとますますめいつてしまった。

2・收容所の生活

「バラックの引ッこしだァ！」

「それ入浴だァ！ ビストレ、ビストレ。（早く早く）」とせきたてられる。

それから「検査」である。

かつての部隊長級である大佐殿も初年兵なみのあつかいだ。

初年兵に氣合ひをかけることばかり日課にしていたような下士官、將校たちは、ビストレ、ビストレの聲におたおたと、完全にそのブザマさをバクロしてしまつた。私もその中の一人だつたことはもちろんである。

半洞窟の、うす暗い、しかもせま苦しいバラックである。何かにつけ行動を制約されることがおびたらしい。「ええッくそー」これは誰にいうとはなしに口に出る言葉だ。捕虜生活もなかなかラ

クなものではない。誰もかれも初年兵時代を思いだして苦笑している。

しかし、こうしたつらい思いも東の間で、やがて三月の解氷期を迎えると、ダモイ（歸還）のデマがとんできた。

「ダモイ？　ほんとか？」

「うそも、ほんともあるものか。ダモイ・ダモイだ！」

「ほんとにダモイか!!」

デマは、バラックからバラックへと飛んでゆく。あるバラックのごときは情報係という専任者までもうけるありさまであつた。

しかし、ダモイはデマにしかすぎない。それでもダモイの聲は、われわれの胸にあらたな希望と動搖とをまきおこすのだ。そのたびごとに失望と落膽を味わうのであつても、ダモイの聲のこころよいひびきは、どんなにかわれわれに慰安を興えてくれたことであらう。

ふたり集まれば、ダモイと食うこと以外の話をしないわれわれだつたが、やがてすこしばかり心にゆとりが出来てくると、マージャンのパイを作つてマージャンをはじめ、碁をやり、將棋をやるというように、趣味や娯樂が顔を見せはじめた。このほか、劇團なども組織されて、各バラックごとに巡回公演をやり、テング連の好演にしばし俘虜という立場を忘れさされたものである。そればかりではない、短歌會、句會、さては向學の士の間では語學講座までもたれたのである。